常松遺跡

第２次発掘調査

福岡県筑紫野市大字常松所在遺跡の調査

筑紫野市文化財調査報告書

第５５集

１９９７

筑紫野市教育委員会

序

筑紫野市は北部九州沿岸地域と内陸部を結ぶ中継地点として、太古の昔より先人たちが行き交った文化の十字路です。市域には各時代のさまざまな遺跡が静かに眠っておりますが、それは長い間かかって蓄積されてきた先人たちの時代を生きた証しです。この過去から連綿と続く人間の営みは、現代に生きる私たちもまたこれを継承しており、後世の子孫たちに語り伝えていくべき文化であると確信しております。また、それはさまざまな社会的な矛盾にまみれながら現代に生きる私たちにとって、地域社会や各々の人間性を見直していく上で確かな指針となっていくことでしょう。

しかしながら、８万数千余の人口を抱える本市における「開発」は加速度的に進み、市政の発展と同時に数多くの遺跡が本来の姿を失っている現状があり、今後さらにその「保護」ならびに日常の生活環境への「融和」を図っていかなければならないと考えております。

最後になりましたが、発掘調査に従事していただきました方々、ご協力を賜りました関係各位の皆様方に心よりお礼申し上げるとともに、今回の成果が郷土の文化財に対する関心を深めるご縁ともなれば幸甚に存する次第でございます。

平成９年６月１日

筑紫野市教育委員会
教育長　永渕　正敏

例　言

1、　本書は、筑紫野市教育委員会が実施した筑紫野市大字常松302番地の２他に所在する常松遺跡の発掘調査報告書である。なお昭和44（1969）年に同地内で別府大学考古学研究室が調査を行っているため、本調査区は「常松遺跡第2次発掘調査」とした。

2、　発掘に係る遺構及び遺物の実測・浄書・写真撮影などは小鹿野亮が行い、遺物の復元及び整理作業については松石かをる・鶴浄美が行った。また、写真測量は（株）大成ジオテック（現場代理人：山中英美）、空中写真は（有）空中写真企画に委託した。

3、　遺構の略号は、土坑をＳＫ、溝状遺構をＳＤとした。また、遺物写真については縮尺は不統一である。なお、挿図中の遺物番号と写真の遺物番号は同一である。

4、　Fig, 4 の常松周辺地形測量図は、昭和44年調査時に作成されたものである。但し、基準点を伴っていないため、周辺の景観をたよりに復元した。(一部再トレース)

5、　挿図の北は磁北を示す。なお、Fig, 4 については国土調査法第Ⅱ座標系を基準とする。

6、　本書の執筆及び編集は、小鹿野が行った。

本 文 目 次

頁
Ⅰ．調査に至る経過…… 5
Ⅱ．周辺域の地理的・歴史的環境…… 5
Ⅲ．調査の概要…… 6
Ⅳ．まとめ…… 10

挿 図 目 次

頁
Fig. 1　発掘調査地点位置図（S1/25,000）…… 1
Fig. 2　発掘調査地点周辺図（S1/5,000）…… 2
Fig. 3　常松周辺地形測量図（S1/5,000）…… 3
Fig. 4　遺構配置図（S1/200）……【折り込み】
Fig. 5　SK－1 実測図(S1/80)…… 6
Fig. 6　〃　出土遺物(S1/2)…… 7
Fig. 7　SK－2 実測図(S1/40)…… 7
Fig. 8　〃　出土遺物(S1/2)…… 7
Fig. 9　SK－3 実測図(S1/40)…… 8
Fig. 10　〃　出土遺物(S1/2・1/3)…… 8
Fig. 11　SK－4 実測図(S1/40)…… 9
Fig. 12　Pit列実測図(S1/40)…… 9

写 真 目 次

頁
PL. 1　全景写真(北半分)…… 12
〃　(南半分)…… 12
PL. 2　SD－1,SD－2斜め写真(西側から)…… 13
〃　(東側から)…… 13
PL. 3　遺構写真…… 14
SK－1
SK－2
SK－3
SK－4
PL. 4　遺物写真…… 15

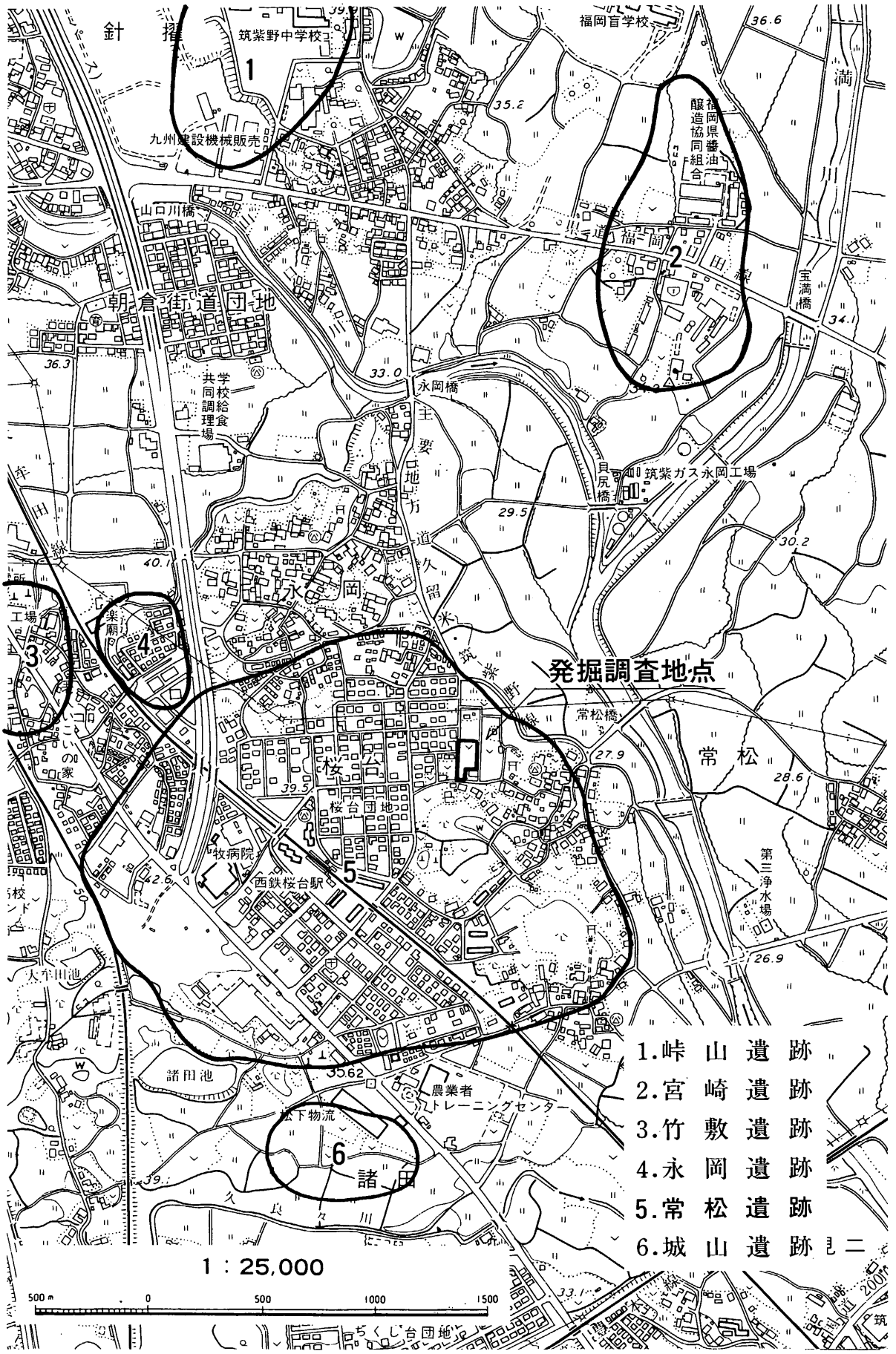


Fig. 1　発掘調査地点位置図（S 1／25,000）

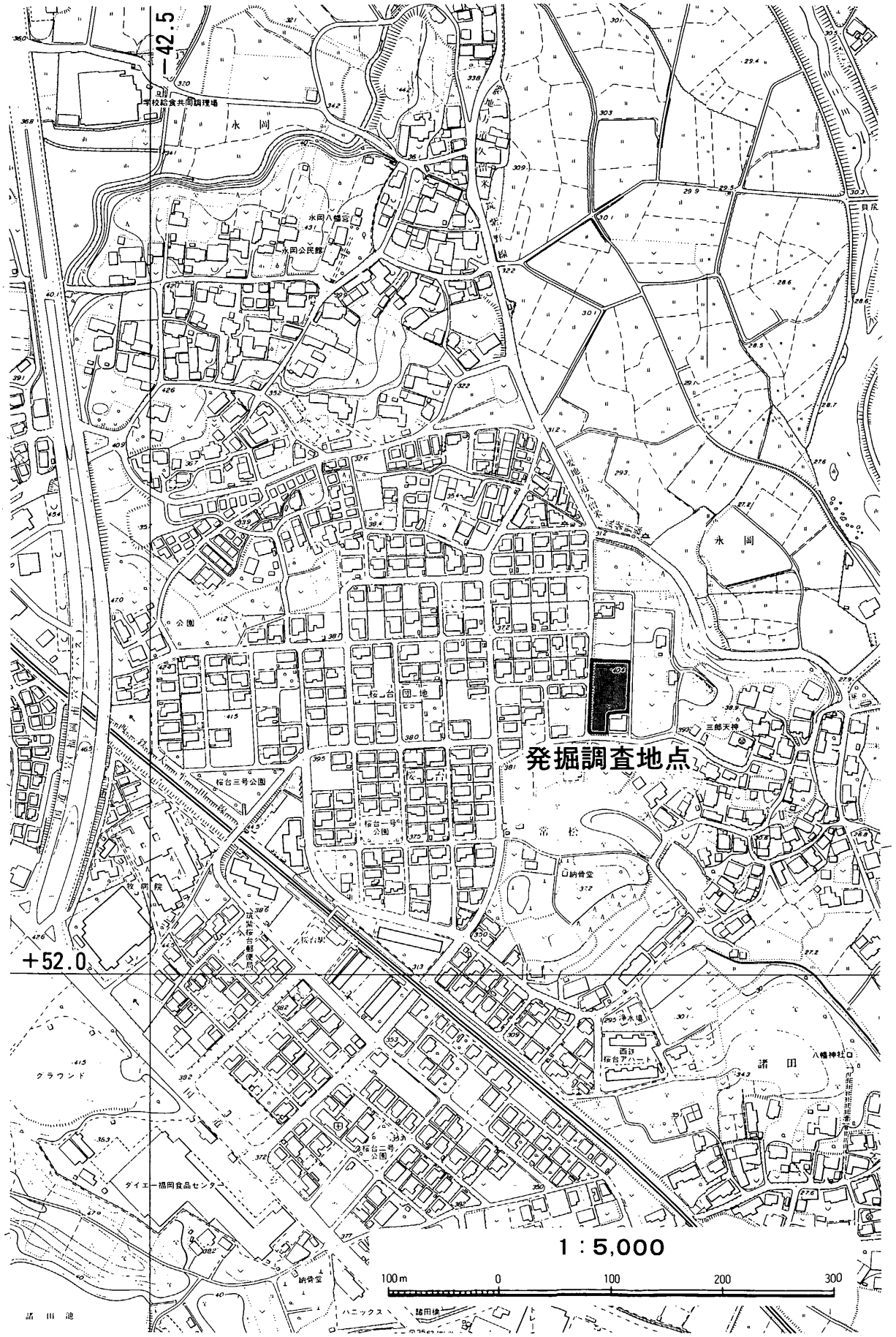


Fig. 2　発掘調査地点周辺図（S 1／5,000)

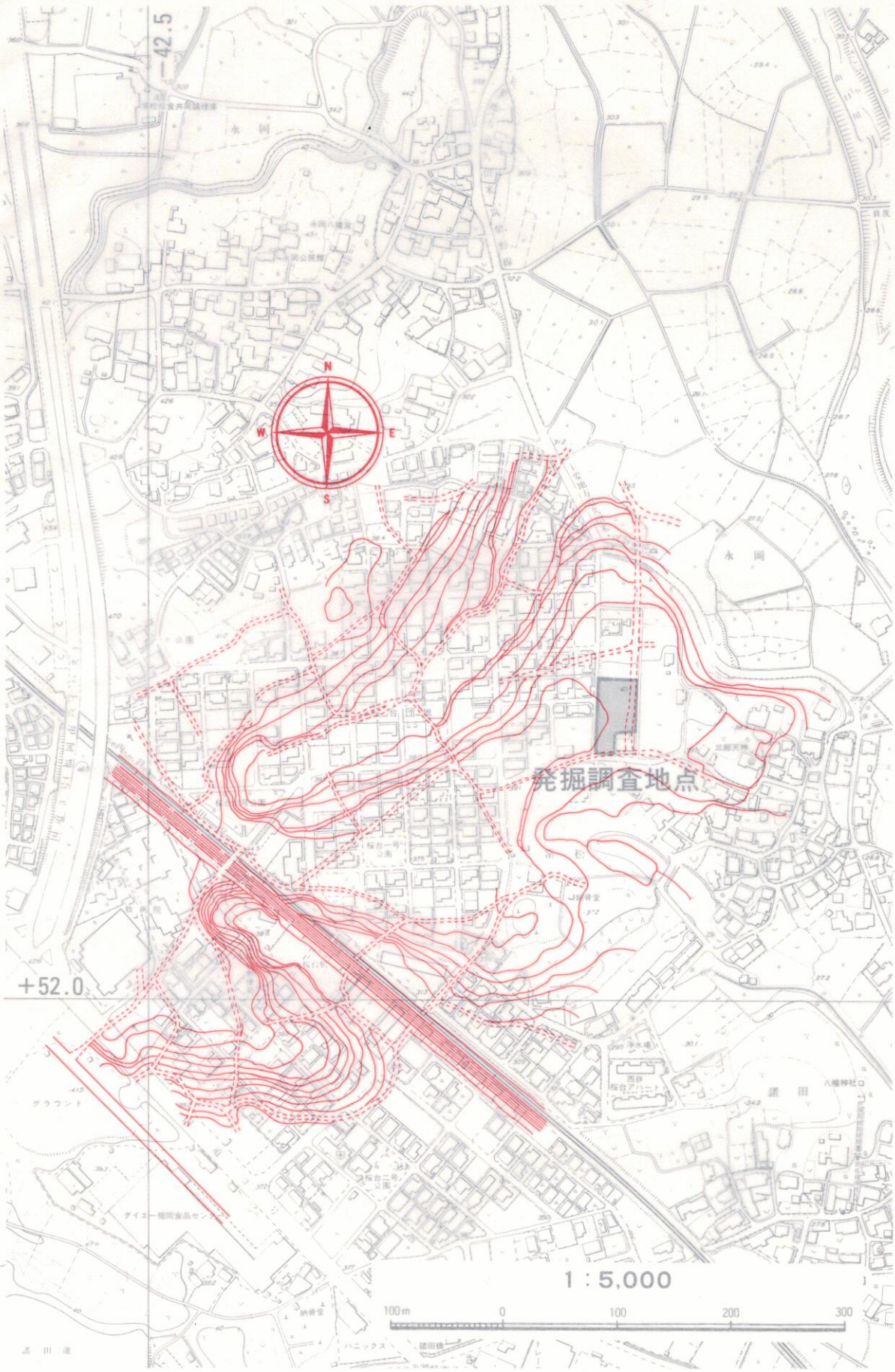


Fig. 3　常松周辺地形測量図（昭和44年）（S1／5,000）

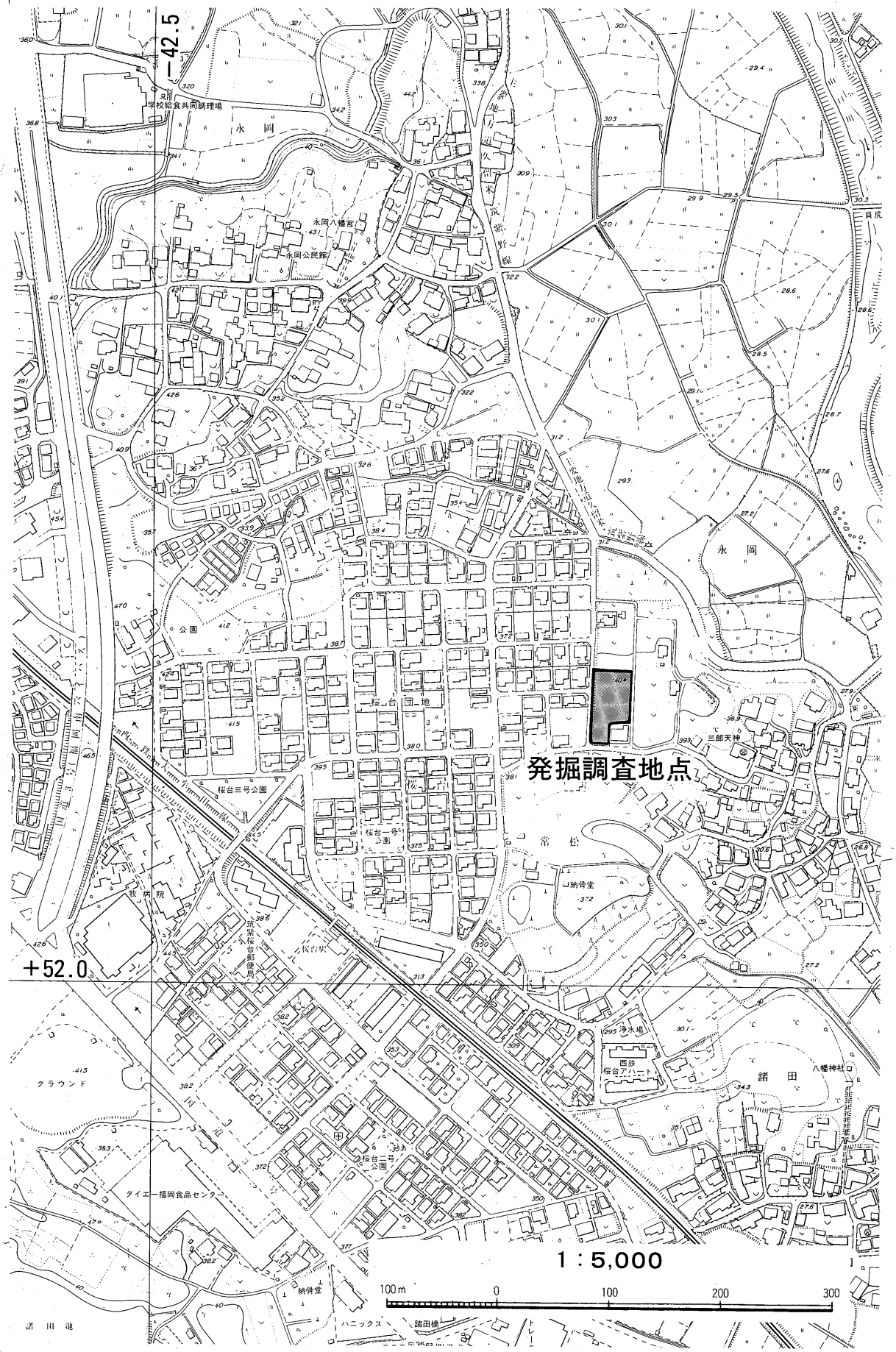


Fig. 3　常松周辺地形測量図（昭和44年）（S 1／5,000）

Fig. 4　遺構配置図（S 1／200)

Ⅰ 調査に至る経過

平成８年５月７日に三宅貞雄氏より筑紫野市大字常松３０２番地の２他の共同住宅建設による農地転用に伴う事前協議がなされた。市教育委員会では、当該地が周知の遺跡の範囲に入っているため、文化財保護法第５７条の２の届け出と試掘調査が必要である旨の指導を行った。こののち平成８年６月２２日に試掘調査を実施し、遺構が確認された。この結果を受けて再度協議を重ねたが、工事による掘削の程度から遺跡の現状保存は不可能であるとの結論に達した。

その後の協議で、当該地における発掘調査を行うこととなり、平成８年８月２日に埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、平成８年８月５日から平成８年１１月２２日まで発掘調査を実施した。

調査組織については以下のとおりである。

調査主体	総　括	教育長	永渕正敏
	庶　務	教育部長	永田晋一
		社会教育課長	岡部隆充
		課長補佐兼文化財担当係長	古賀幸信
		臨時職員	中富貴代美
		技師	小鹿野亮
	発掘調査	技師	小鹿野亮

Ⅱ 周辺域の地理的・歴史的環境(Fig.1～3)

本遺跡は、三郡山塊の一つである宝満山を源とする宝満川の上流西岸に展開する丘陵上に所在する。この低丘陵は背振山塊より派生しており、八ツ手状に浸入谷によって仕切られた舌状台地の一つである。この北半部には弥生時代中期を中心とした永岡遺跡（註１）が所在している。そして大きな谷を隔てた南半部には常松遺跡が所在し、弥生時代中期初頭から前半にかけての竪穴住居跡・甕棺墓・溝状遺構が調査されている（註２）。この溝は丘陵を横断する大溝で、隣接した丘陵にも続いていたことが確認されている。この一帯には、各台地上にそれぞれ独自性をもった集団が占拠していた状況が想定されており、その相関の解明が今後の課題である。

註１　福岡県教育委員会『永岡遺跡』福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第１集　１９７０

福岡県教育委員会『永岡甕棺遺跡・図版編』福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第４集　１９７６

福岡県教育委員会『永岡甕棺遺跡・本文編』福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第５集　１９７７

筑紫野市教育委員会『永岡遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第６集　１９８１

筑紫野市教育委員会『永岡遺跡Ⅱ』筑紫野市文化財調査報告書第26集　１９９０

註２　賀川光夫他『福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡調査報告書』別府大学文学部史学科考古学研究報告書１　１９７０

Ⅲ 調査の概要(Fig.4,PL.1)

今回の調査は、常松遺跡の東側縁辺部に近い1962.19㎡について行った。本調査区においては、畑地を何度も造り替えているうえに、最近までは茶畑だったこともあって樹木などによる撹乱が多かった。また遺構の検出面が、G.L.から約10～30cmと浅かったため遺構の遺りは悪かった。

今回検出されたのは、土坑（ＳＫ）4基・溝状遺構（ＳＤ）40条・Ｐｉｔ783である。弥生時代の遺構や遺物は皆無で、概ね中世以降の所産と考えられる。しかも遺構に伴う遺物は少なく、時期については不明なものが多い。また、Ｐｉｔについては建物として並ぶような状況は見出せなかった。

本調査区の北方についてはだらだらと地形が低くなっており、遺跡の包蔵される可能性は低いと考えられるが、調査区の東から南方向にかけては遺構の密度が濃くなっており、遺跡の広がりが想定できる。但し、前述の昭和44年に調査された弥生時代の集落や墓地の範囲は、ここで途切れているものと考えられる。

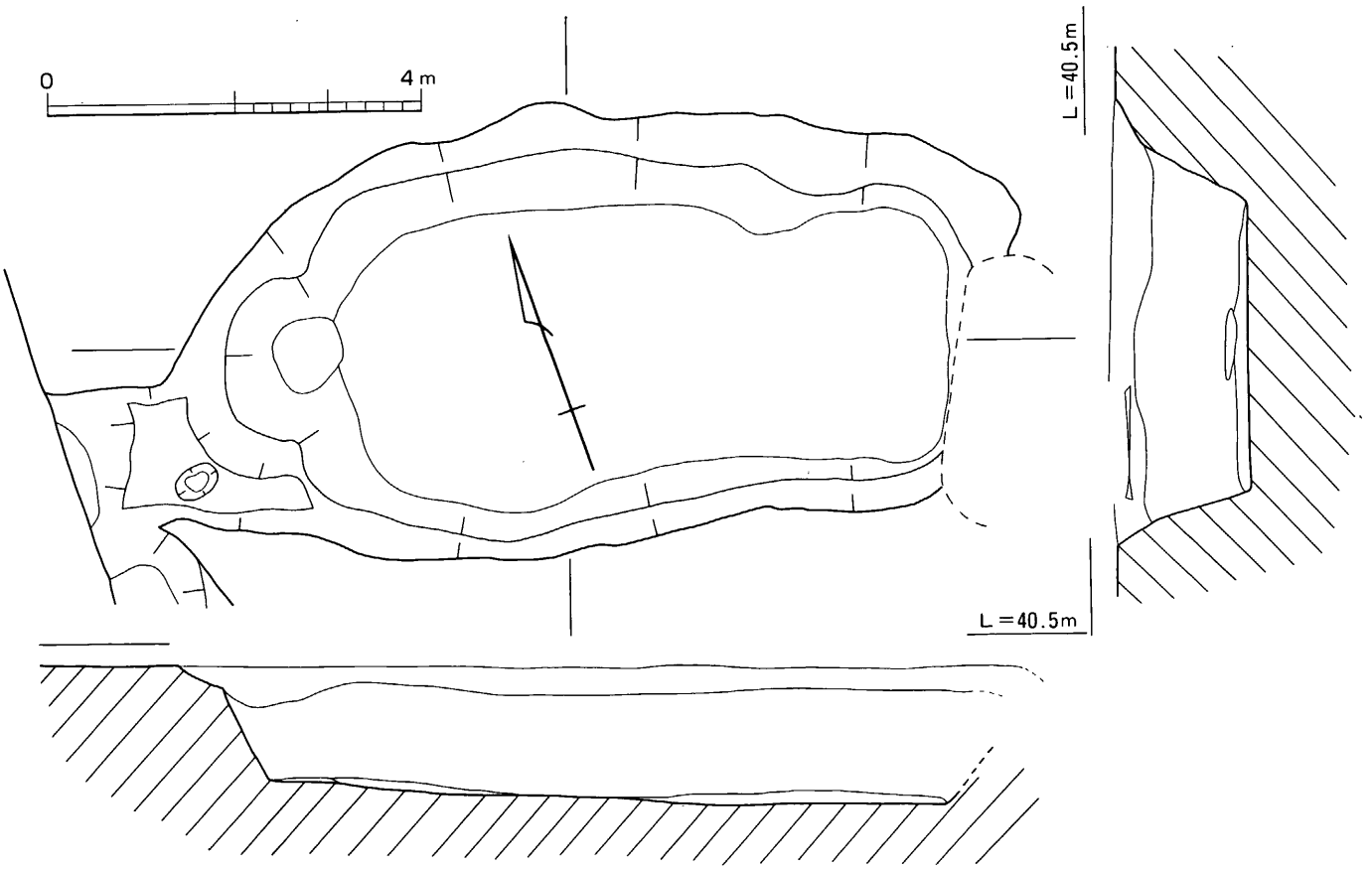


Fig.5　ＳＫ－１実測図(Ｓ1/80)

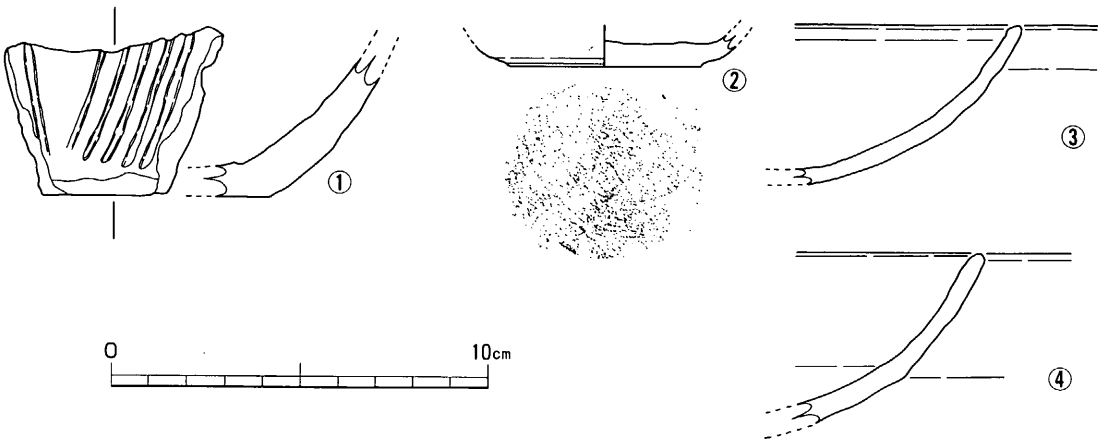


Fig.6 ＳＫ－１出土遺物(Ｓ1/2)

土坑(Fig.5～11,PL.3・4)

土坑については、遺物が少なく時期の特定はできなかったが、そのいずれも暗茶褐色粘質土ベースに黄褐色粘質土塊を含む埋土であった。

ＳＫ－１

調査区の西端に位置する。長径約8.5m・短径4.8m深さ1.2～1.5mを測る。形状は一部撹乱で壊されているがやや歪んだ楕円形を呈す。床面は西端がピット状のステップになるものの、全体的にはフラットである。壁土については若干硬化した部分が確認できたが、機能は不明である。

出土遺物

①は陶器の擂鉢の底部である。内面の刻みは5条1単位で、外面は被熱し煤が付着する。②は土師器の小皿である。底部は糸切りで、底径は5.1cmを測る。調整は外面はヨコナデ、内面は不定方向のナデを施す。③・④は土師器の坏である。ローリングを受けており、調整は不明である。

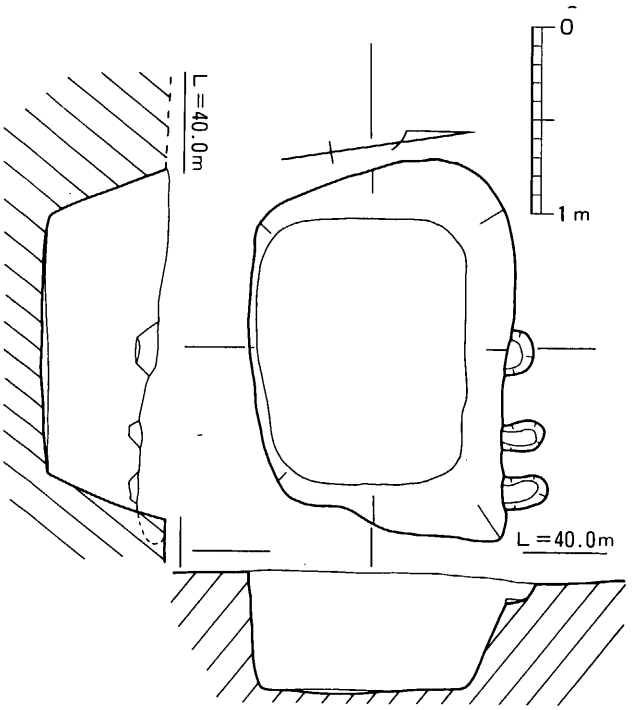


Fig.7 ＳＫ－２実測図(Ｓ1/40)

ＳＫ－２

ＳＫ－２は、ＳＫ－１の東脇に位置する。長径180cm・短径130cmのやや歪んだ隅丸長方形を呈し、深さ約120cmを測る。機能については不明である。

出土遺物

⑤は白磁椀の高台部で、見込には焼成時の釉薬の付着痕が残る。高台脇は露胎となる。⑥は白磁椀の高台部で、高台脇は露胎となる。

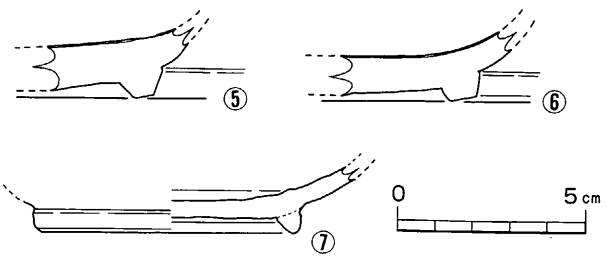


Fig.8 ＳＫ－２出土遺物(Ｓ1/2)

見込は釉薬が鰄状になっており、焼成不良の粗悪品である。⑦は土師質土器の坏で、高台内に「×」のヘラ記号がある。

ＳＫ－３

ＳＫ－３は、調査区の南端で検出された。長径197cm・短径約130cm・深さ約30cmを測る。床面は平坦を呈し、中心に向かってやや窪んでいる。埋土中からは土師器の小皿が5点出土しているが、遺構の残存状態が悪く、上からの撹乱もあったため、埋葬時の供献土器であるかどうかは不明である。ＳＫ－３は墓の可能性もあるが、ここでは一応、土坑として扱った。

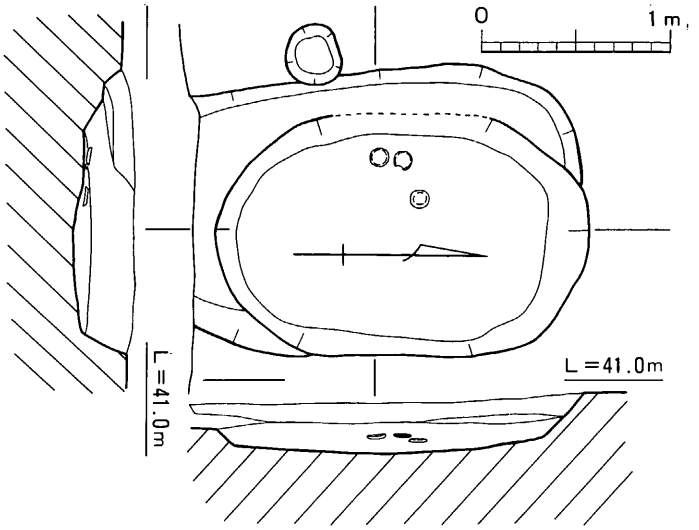


Fig.9 ＳＫ－３実測図(Ｓ1/40)

出土遺物

⑧は土師器の坏で、口径は14.8cmを測る。⑨は白磁椀の口縁部である。口縁は玉縁口縁を呈す。⑩～⑭は土師器の糸切り皿である。何れもローリングを受けており、磨滅している。法量は、⑩は底径6.6cm・器高1.2cm、⑪は底径7.5cm・器高1.1cm、⑫は底径7.5cm・器高1.1cm、⑬は底径7.9cm・器高1.2cm、⑭は推定底径6.6cm・器高1.1cmを測る。⑮は白磁椀の底部である。胎土は粗く、砂粒を多く含む。⑯は四耳(？)壷の破片である。釉薬は外面上位から薄く光沢のない暗茶褐色の釉を流掛けする。耳の貼付される位置には沈線が1条巡り、胎土中には少量の黒色粒が含まれる。⑰は滑石製石鍋の破片である。口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がり、鍔部の断面は縦長の台形を呈する。鍔部直上には蔓取手穴が穿たれている。ケズリは外面は丁寧に整えられているが、内面は無秩序で雑な感がある。12世紀から13世紀前半のものと考えられる。

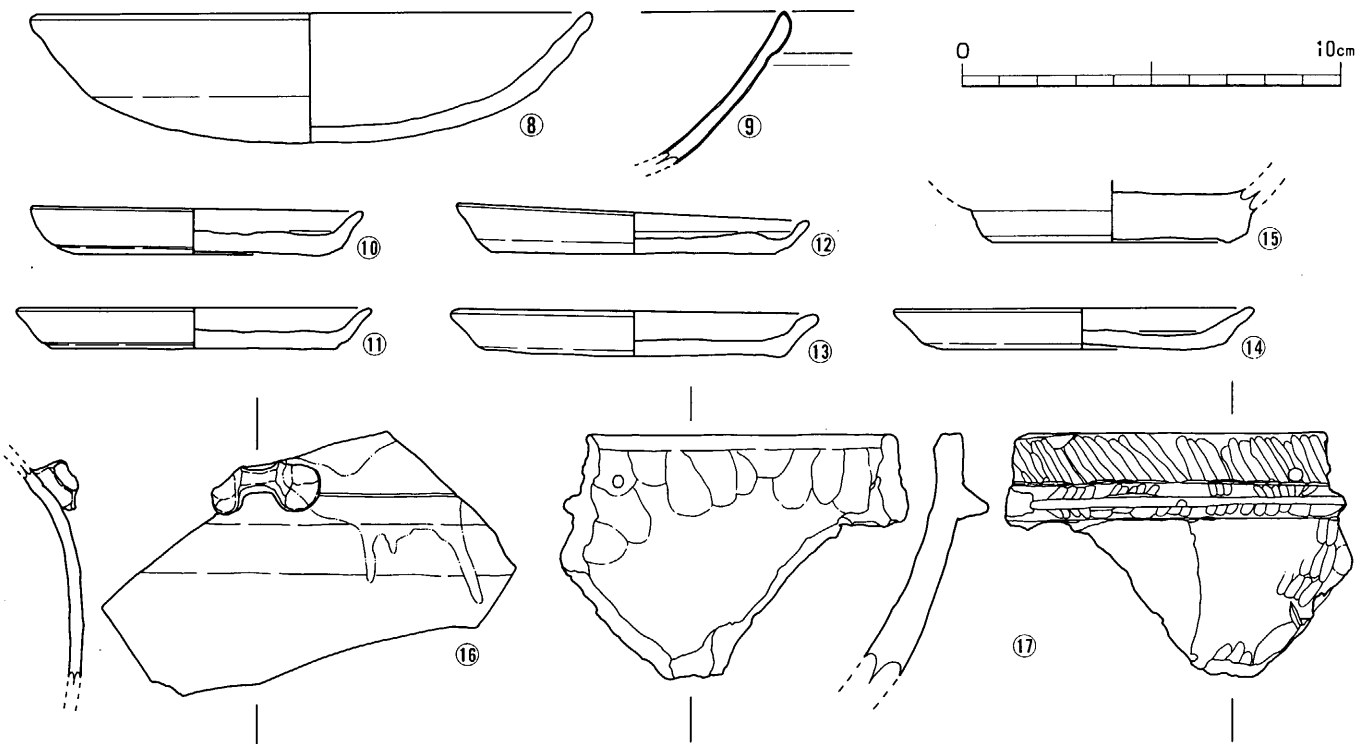


Fig.10 ＳＫ－３出土遺物(Ｓ1/2・1/3)

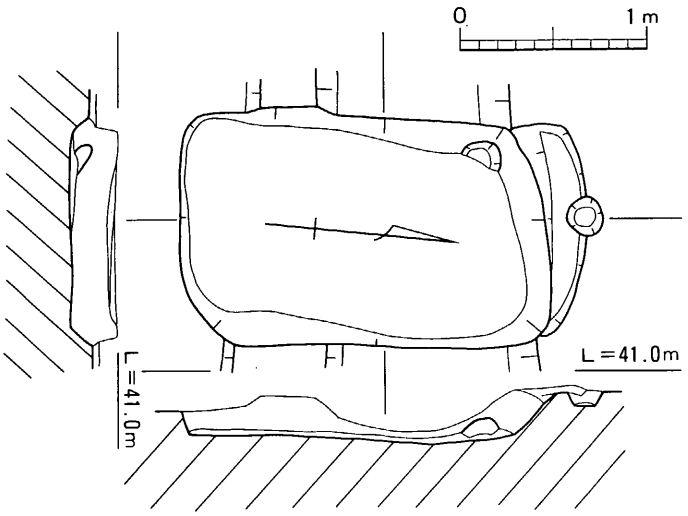


Fig.11　ＳＫ－４実測図(Ｓ1/40)

ＳＫ－４

ＳＫ－４は、調査区東端に位置し、ＳＤ－２に切られる。出土遺物は皆無であり、時期は不明である。寸法は長径194cm・短径120cm・深さ約20cmを測り、隅丸長方形を呈する。

Ｐｉｔ列(Fig.12)

調査区の東端に位置する。周辺を精査したが、掘立柱建物として並ぶ状況は見出すことはできなかった。調査区外に延びていくものと考えられるが、時期・性格ともに不明である。

Ｐｉｔの形状は不整な円形を呈し、直径は約30cm・深さは40cm程度である。

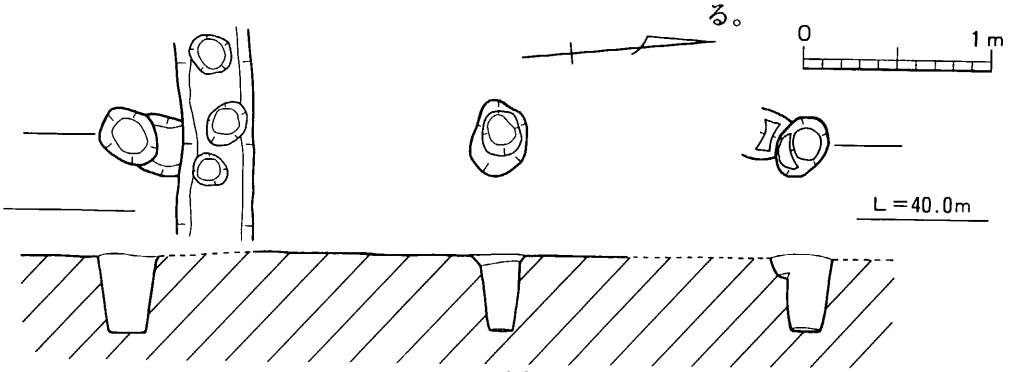


Fig.12　Ｐｉｔ列実測図(Ｓ1/40)

溝状遺構（Fig.4,PL.2）

ＳＤ－１は幅約60cm・深さ10～20cmを測り、一部途中で途切れている。断面は逆台形を呈する。

ＳＤ－２は幅約50～120cm・深さ10～20cmを測り、ＳＤ－１にほぼ並行して延びている。断面は逆台形であるが、部分的にテラスを有する形状である。 ＳＤ－１、ＳＤ－２ともに埋土は暗茶褐色粘質土ベースに黄褐色粘質土塊を含むもので、遺物がなかったため、時期については不明である。調査区の中心を緩やかにカーブしながら東西に横切っているＳＤ－１とＳＤ－２に挟まれた空間は、道路遺構の可能性がある。但し、それは道路の側溝と呼べるようなものではなく、単なる境界を示すものであると考えている。

ＳＤ－３は、先述のＰｉｔ列に直行する溝である。幅約50cm・深さ約20cmを測り、断面は逆台形を呈する。

その他の溝状遺構については、その何れも幅約50cm・深さ約10～20cmを測るものである。遺物を含んでいなかったため時期を決定しがたいが、近年の農業に伴う開墾ないしは畝跡であろうと考えられるため、遺構番号を付さなかった。

Ⅳ まとめ

「常松」という地名については、『正任記』所収の『大内政弘下文』の記載が文献上の最古の史料である（註１）。これによると、文明10（1478）年10月13日に「三笠郡恒松七町五段地　白松三郎跡」を窪山美濃守盛恒に安堵したことが窺え、少なくとも15世紀後半には常松(恒松)村が成立していたことが確認できる。また、「白松三郎跡」という語の解釈については、他の史料が無いため何を示しているのか不明であるが、本調査区の東側には常松村の産土神である「三郎天神社」が位置しており、何らかの関連性が想定できる。このことから、神社の成立も村の成立とほぼ同時期であると考えられる(註２)。

調査区を東西に横切るＳＤ－１・ＳＤ－２は、出土遺物が無く、詳細については不明である。この２条の溝は一部途切れるもののほぼ並行して延びており、芯心距離は、約2.5mを測る。旧地割の境に位置していることから(註３)、道路遺構の可能性がある。また、「三郎天神社」の方向へ緩やかにカーブしながら延びていることから、神社に関係した古道である可能性もある(註４)。

しかしＳＤ－１・ＳＤ－２については、かなりひどい削平を受けており、残存状態が悪かったため、渡部徹也氏によってまとめられているような古道の施工状況は検出できなかった(註５)。このため本遺跡の場合は、いくら2条の溝が並行しているからといって、即ち道路であるという根拠にはならない。特に江戸時代以降の農地の畦畔などは、2～3mの幅で明確にその痕跡を示す場合が多いし、また今回は古代の官道のように、計画性をもって築造された痕跡が明確に把握されていないため、充分な検討を要する。

今回の調査で検出された遺構については、直接的に周辺域の歴史景観を復元できるものは確認できなかった。しかし、本遺跡は北方に宝満川流域の平野部を見下ろす要地に立地しており、12～13世紀を中心とした中世の遺構が見つかる可能性が高いと考えられる。今後の周辺域の調査を含めて、検討してみたいと思う。

註１　〔正任記〕十月四日、壬辰、天晴、立冬

一 筑前仁地望事、 付 無足仁事、分限注文有之、五四三二十五也、(中 略)

下　窪山美濃守盛恒

――早良郡比井郷内貳町六段大地 松山入道七町六段大内、三笠郡恒松七町五段地 白松三郎跡、等事

右以人 ――　　文明十年十月十三日

※ 窪山美濃守盛恒については史料中に付け加えられている注釈に、「筑前ノ士、陶弘護同道ノ諸将」とある。また、文明１０年は応仁の乱が終焉をむかえた翌年に当たる。筑前国の諸将が、筑前にある防長の諸寺社領を半済とすることを要望し、分限を得ようとしたことが窺える。

東京大学史料編纂所編『大日本史料』第八編之十 東京大学出版会　１９２４(１９７１復刻)

竹内理三ほか編『角川日本地名大辞典』４０福岡県　角川書店　１９８７

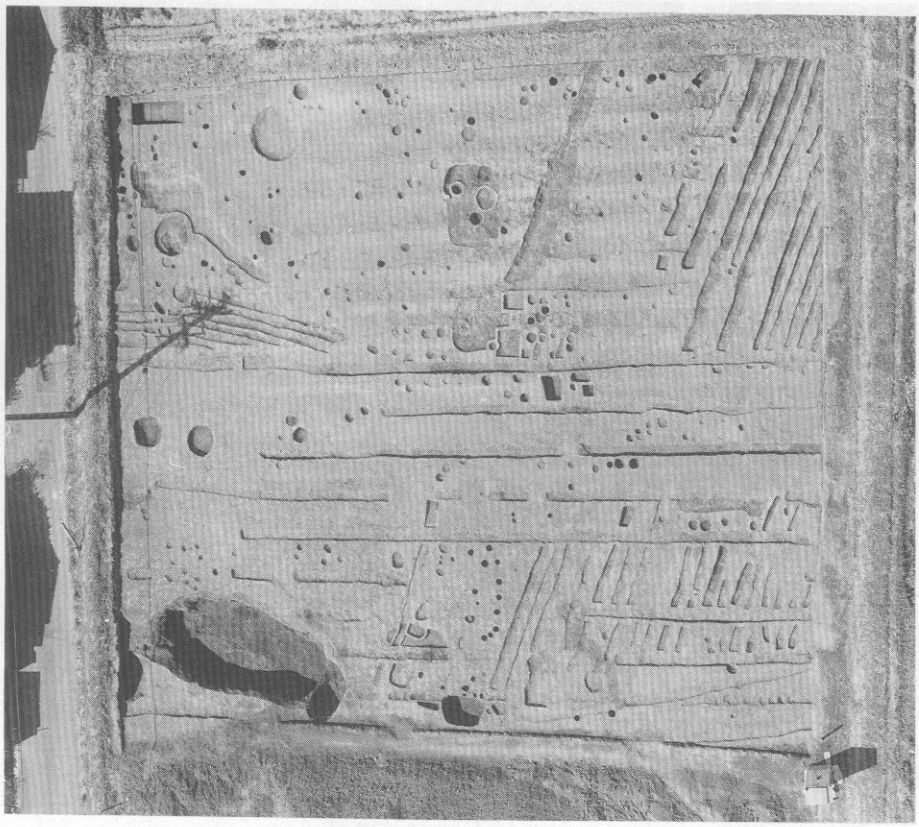
註２　山村淳彦氏ご教示。

註３　地権者 三宅貞雄氏ご教示。

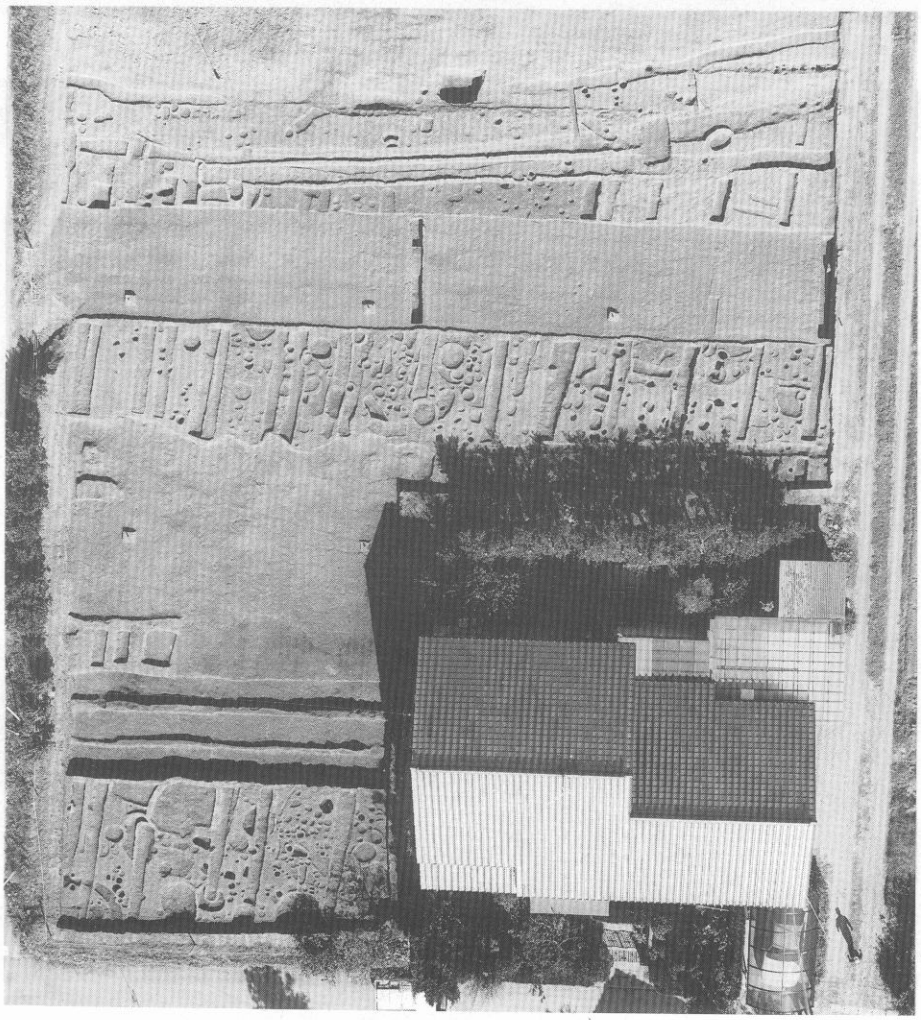
註４　「三郎天神社」については、移設されたという記録は無く、現在の場所が原位置である可能性が高い。ここでは、江戸時代以降に移転されていないことが前提である。

註５　渡部徹也「古道について～主に官道以外の事例から～」『古文化談叢』第３３集　１９９４

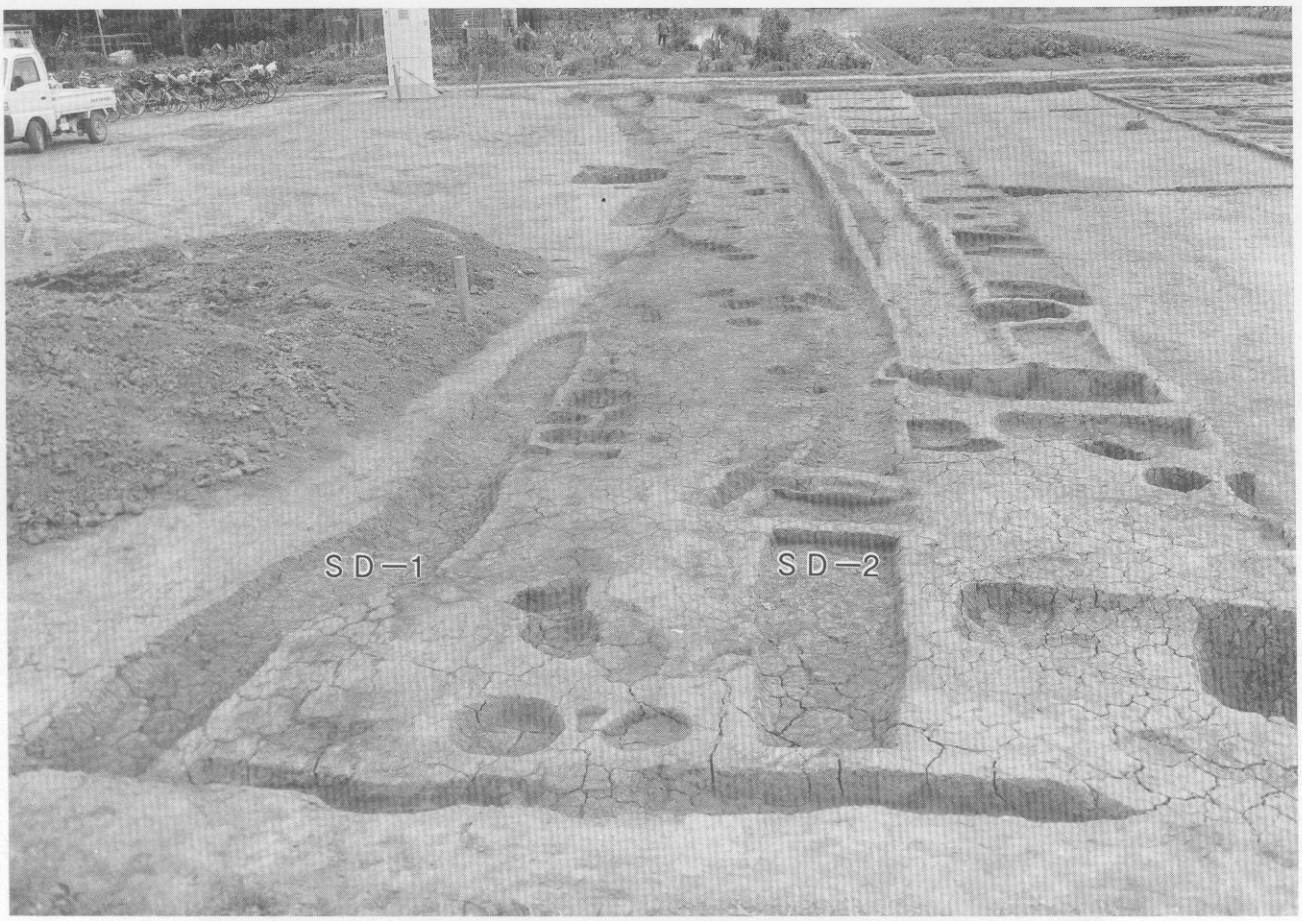
写　真



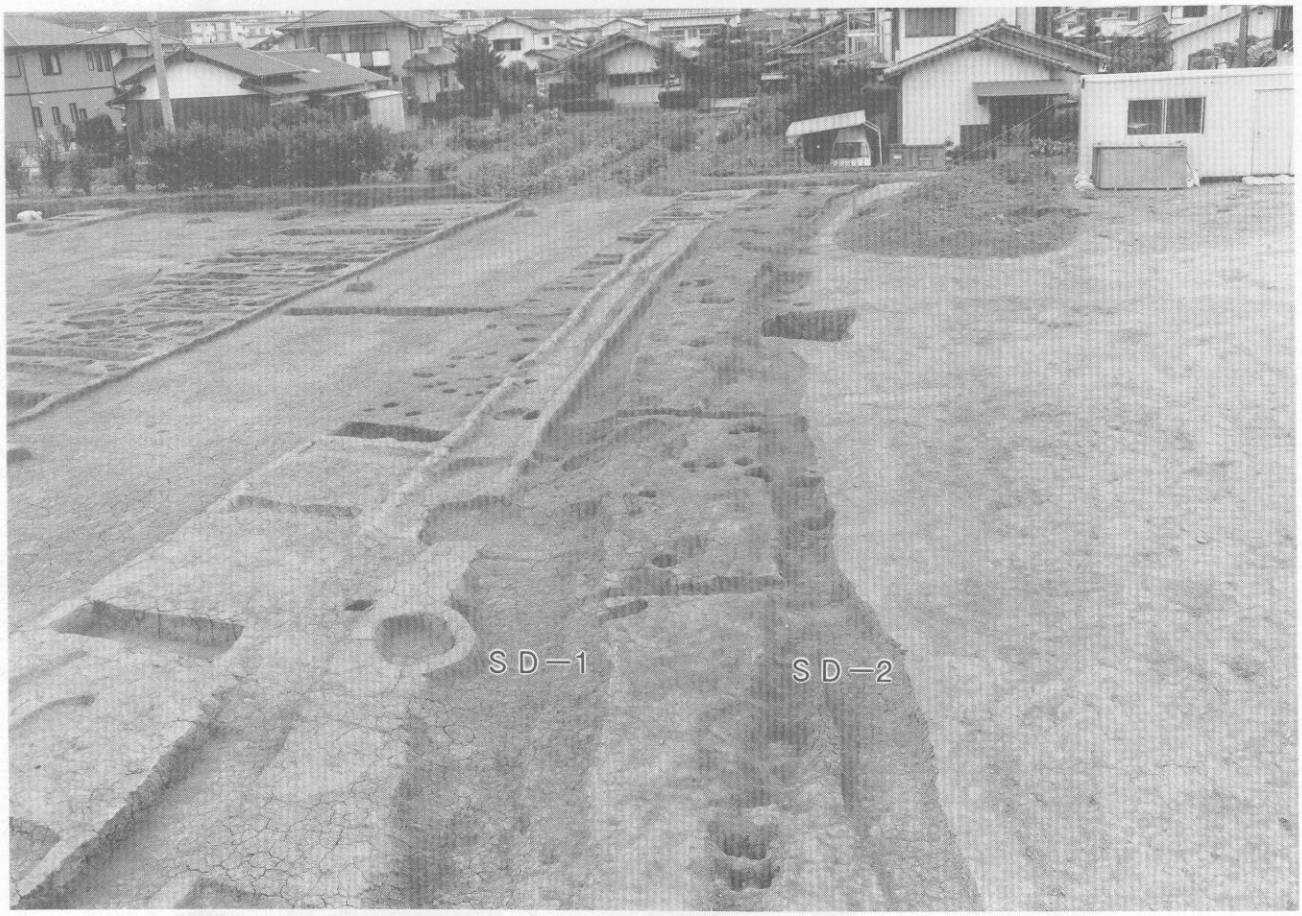
全景写真（北半分）



全景写真（南半分）

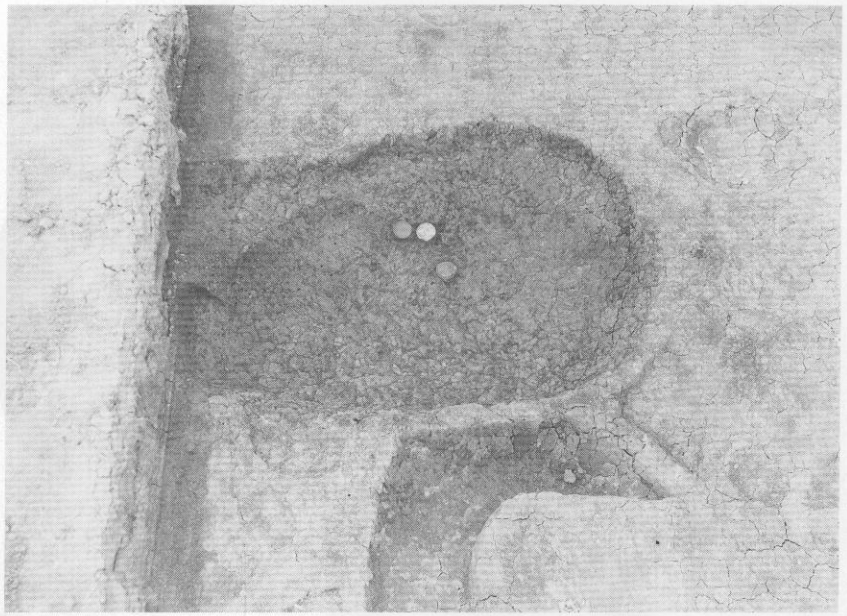


SD−1, SD−2 斜め写真（西側から）

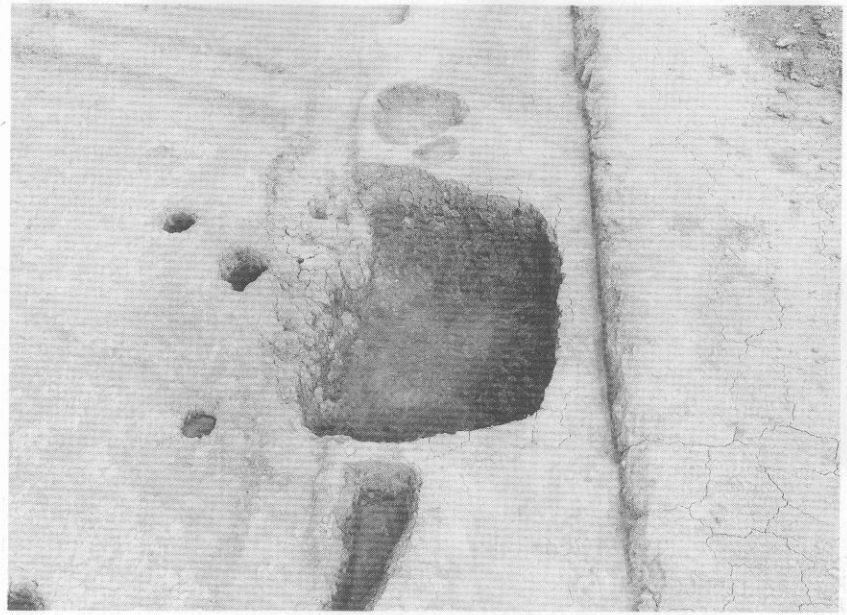


SD−1, SD−2 斜め写真（東側から）

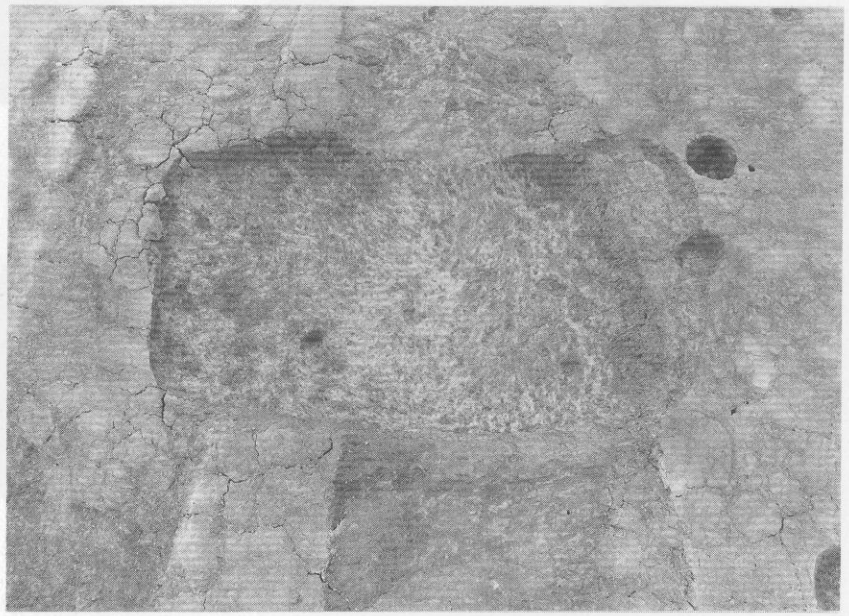
SK−1



SK−3

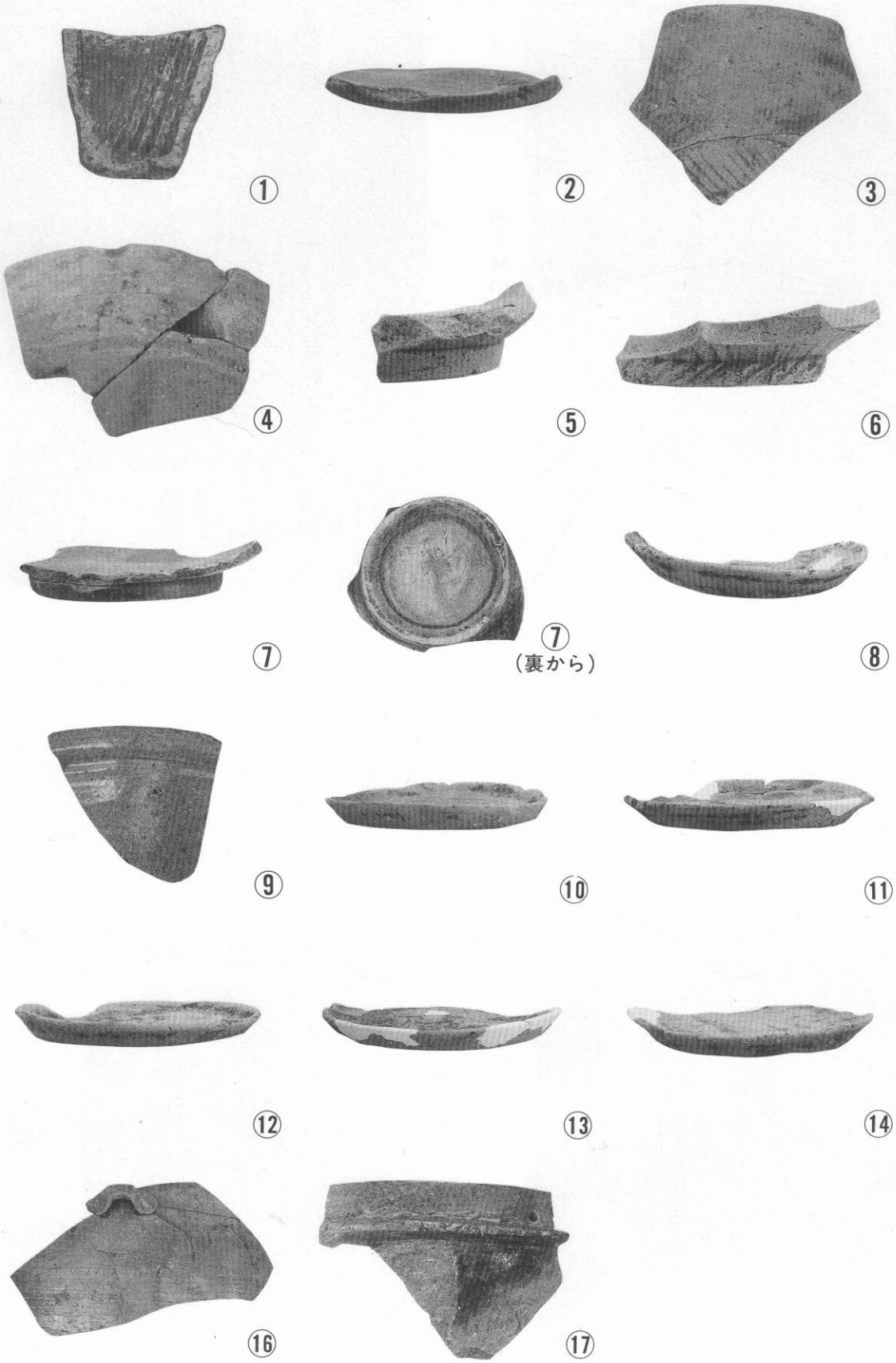


SK−2



SK−4

PL. 3



遺物写真

報告書抄録

フリガナ	ツネマツイセキ　ダイニジハックツチョウサ
書名	常松遺跡　第２次発掘調査
副書名	福岡県筑紫野市大字常松所在遺跡の調査
シリーズ名	筑紫野市文化財調査報告書
シリーズ番号	第55集
編集者名	小鹿野　亮
編集機関	筑紫野市教育委員会
所在地	〒818　福岡県筑紫野市大字二日市753－1　TEL　092－923－1111
発行年月日	西暦1997年6月1日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
常松(つねまつ)遺跡	筑紫野市(ちくしのし) 大字常松(おおあざつねまつ) 302－2他	二日市	1770118	33度 28分 14秒	130度 32分 50秒	19960802 ～ 19961122	1962.19	共同住宅建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
常松遺跡	集落跡	中世	溝状遺構 土坑 他	白磁 陶器 土師器 他	

常松(つねまつ)遺跡

第２次発掘調査

福岡県筑紫野市大字常松所在遺跡の調査

筑紫野市文化財調査報告書
第55集

発行　筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753－1
印刷　秀英社印刷株式会社
福岡県筑紫野市武蔵313－13